

2013

# 東日本災害ボランティア 第3次福岡大学派遣隊



～未来へ繋ぐ～



## 目 次

○刊行にあたって .....	責任者（学生部長）小野寺 一 浩	1
1 第3次派遣隊の活動概要と参加者名簿 .....		3
2 募集から活動報告まで .....		6
3 被災地での活動内容 .....		8
1. 現地到着日 .....		8
2. 活動1日目 .....		10
3. 活動2日目 .....		13
4. 活動3日目 .....		15
5. 東北学院大学交流および、帰福日 .....		18
4 派遣隊員レポート .....		19
1. 学生レポート .....		20
2. 引率者レポート .....		38
5 活動でお世話になった方々からのメッセージ .....		41
○第3次派遣隊にご支援ご協力いただいた方々		
○謝辞		



# 刊行にあたって

第3次福岡大学派遣隊隊長  
学生部長 小野寺 一 浩

東日本大震災から早くも3年余りが経過しようとしています。復興の歩みは続けられてはいるものの、未だに仮設住宅での生活を余儀なくされるなど、震災前の暮らしを取り戻すにはほど遠い状況にあります。福岡大学では、復興への一助となることを願い、本年度も「第3次福岡大学派遣隊」を被災地に送りました。

2011年3月11日未曾有の大津波が、三陸の地をはじめ東日本を襲いました。その映像が流されるや福岡大学では、多くの学生が大学に被災地救援のために行動したいと申し出てきました。その声に応えるべく、大学では「第1次福岡大学派遣隊」の結成を支援し、事前研修を重ねたうえで被災地に派遣しました。「第1次派遣隊」から本年度の「第3次派遣隊」まで、学生が主体となり、大学が側面から援助するという形で派遣隊の活動は続けられています。

近年、若者のコミュニケーション能力不足をいたる所で耳にします。しかし、被災地で、被災者の方々の生活に思いを馳せながら慣れないスコープを使い、何とか言葉の底にある本当の気持ちを理解しようと努めながら被災者の方々と話す学生を身近にすると、その指摘は必ずしも的確なものではないように思われます。

また、被災地での活動が学生を大きく成長させております。被災地で活動した学生は、「被災者の方々を元気づけようと思っていたが、反対に被災者の方々から元気をいただいた。」と口をそろえて言います。到底言葉では言い表せないような厳しい生活を送られているにもかかわらず、学生ボランティア団体を快く受け入れていただき、学生に大いなる成長の場を与えて下さった被災者の方々に心より感謝申し上げますと同時に一日も早い復興を祈るばかりです。

最後となりましたが、「第3次福岡大学派遣隊」の活動を支えて下さった、多くの方に心より御礼申し上げます。



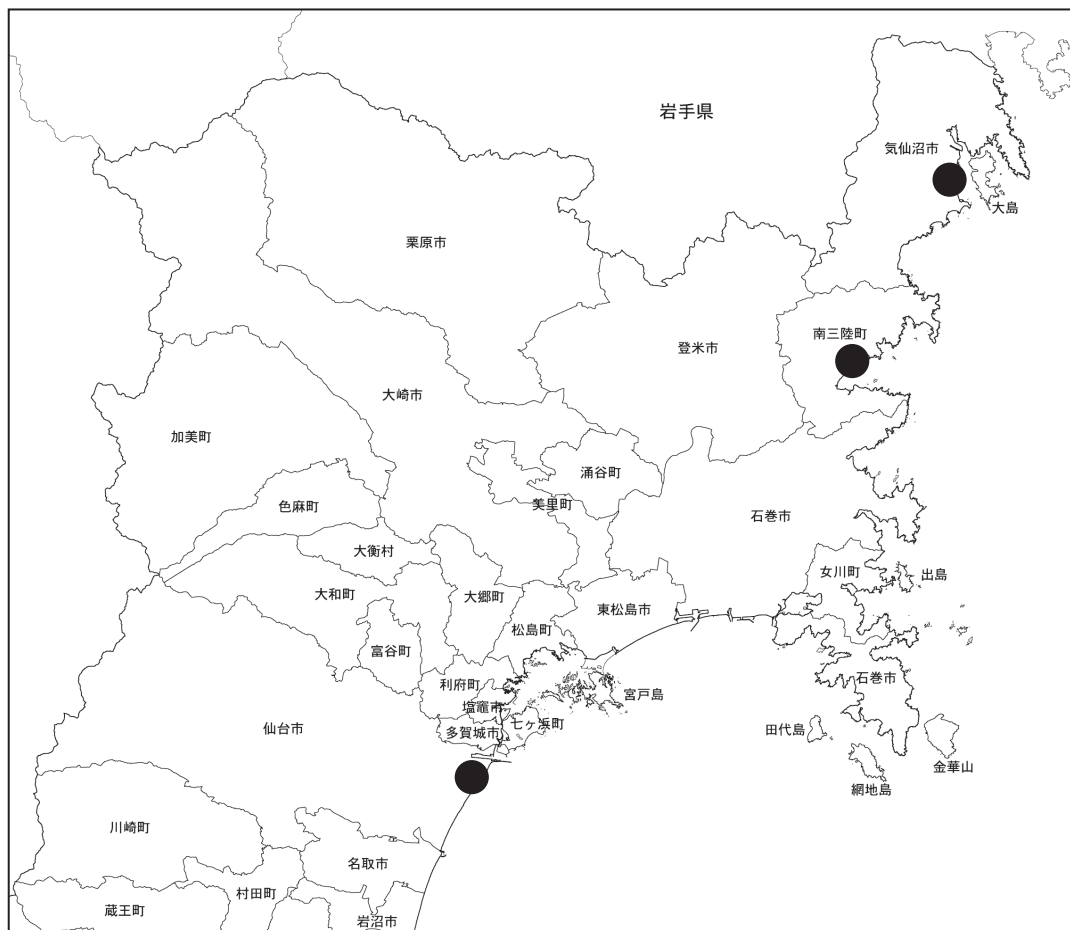
# 1 第3次派遣隊の活動概要と参加者名簿

## 1. 概要

派遣期間	2013年8月26日(月)～8月30日(金)
派遣人員	総勢30名(学生26名、教職員4名)
派遣先	宮城県南三陸町、気仙沼市、仙台市若林区
主な活動内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上山八幡宮参拝および神主による講話、被災体験の紙芝居の講演</li> <li>・南三陸町、仙台市若林区でのがれき撤去作業</li> <li>・南三陸町災害ボランティアセンター訪問</li> <li>・南三陸町町長表敬訪問</li> <li>・志津川中学校仮設住宅での清掃活動</li> <li>・気仙沼市「第18共徳丸」、陸前高田市「奇跡の一本松」見学</li> <li>・南最知仮設住宅の清掃および住民の方々との交流</li> <li>・面瀬小学校での交流・学習支援</li> <li>・上山八幡宮での清掃活動</li> <li>・東北学院大学での活動報告およびグループディスカッション</li> </ul>

## 2. 活動場所

・宮城県南三陸町、気仙沼市、仙台市



### 3. 活動行程

#### 東日本災害ボランティア「第3次福岡大学派遣隊」行程表

- ・派遣期間：平成25年8月26日（月）～30日（金）5日間、うち活動期間3日間
- ・宿泊場所：「南三陸ホテル観洋」〒986-0766 宮城県本吉郡南三陸町黒崎99-17 電話 0226(46)2442 FAX 0226(46)6200
- ・出発日：8月26日（月）10:00 福岡空港第1ターミナル集合 10:30 出発式 / 11:15 発 SKY882 便  
⇒ 13:00 仙台空港着 / 13:30 貸切バス1台で出発  
⇒ 15:00 プログラム系用の飲み物買い出し（道沿いのスーパー等）⇒ 16:00 上山八幡宮着 活動の安全祈願、神主さんのお話等 ⇒ 18:00 ホテル着
- ・帰福日：8月30日（金）7:30 ホテル発 ⇒ 15:00 仙台空港着 / 16:20 発 SKY885 便 ⇒ 18:25 福岡空港着
- ※小野寺学生部長：8月26日（月）11:15 福岡発 ⇒ 13:00 仙台着 SKY882 便 / 8月27日（火）16:20 仙台発 ⇒ 18:25 福岡着 SKY885 便
- ※井手学生部事務部長：8月28日（水）11:15 福岡発 ⇒ 13:00 仙台着 SKY882 便 / 8月30日（金）16:20 仙台発 ⇒ 18:25 福岡着 SKY885 便
- ・派遣人員：30名 内訳：学生26名（男11名、女15名）、引率者4名（教育職員1名、事務職員3名）

班	8/26(月)	8/27(火)	8/28(水)	8/29(木)	8/30(金)	ボランティアセンター等
A班 (前田)		【体力作業】 学生：26名 (A・B・C班) 引率者：3名 (小野寺隊長、 三浦、飯星) 計29名 ※当日の依頼状況に より学生および引 率者は適宜分かれ てグループ構成、 移動。	【体力作業】 場所：仙台市若林区 学生：8名(A班) 引率者：井手学生部事務部長、 三浦	【体力作業】 場所：仙台市若林区 学生：8名(A班) 引率者：三浦	ホテル観洋 →東北学院大学 →仙台空港 A・B・C班26名 (前田、西田、鹿垣)	南三陸町災害VC TEL：0226-46-4088 (受付)8:30～9:00 (活動)9:00～16:00
B班 (西田)	仙台空港 →上山八幡宮 →ホテル観洋 A・B・C班26名 引率者：3名 (小野寺隊長、 三浦、飯星)		【体力作業】 B班、C班共同で南三陸 町でがれき撤去作業 学生：18名(B, C班) 引率者：飯星	【プログラム】 場所：気仙沼市南最知 仮設住宅 学生：18名(B, C班) 引率者：井手学生部事務部長、 飯星		気仙沼市社会福祉協議会VC TEL：0226-22-0722 FAX：0226-22-0732 地域支援班
C班 (鹿垣)	(前田、西田、鹿垣)					一般社団法人 ReRoots 宮城県仙台市若林区 TEL：022-762-8211 (受付)8:30～9:00 (活動)9:00～16:00



#### 4. 参加者名簿

派遣人員：計30名

学生26名（男11名、女15名）

引率者4名（教職員1名、事務職員3名）

引率者一覧	
氏名	所属
小野寺一浩	隊長、法学部教授、学生部長
井手 俊輔	学生部事務部長
三浦 和也	学生課員
飯星 信二	学生課員

A 班	
学部・学年	氏名
法学部法律学科3年	前田光太郎（全体リーダー）
商学部貿易学科4年	樗木 公詞
商学部経営学科3年	田村 聡浩
スポーツ科学部スポーツ科学科1年	佐藤亜佑美
スポーツ科学部スポーツ科学科1年	伊達 綾子
商学部貿易学科3年	安武かおり
経済学部経済学科3年	兼子 大輝
人文学部英語学科3年	高橋 美帆

B 班	
学部・学年	氏名
法学部法律学科3年	西田 直人
法学部経営法学科4年	山口志保美
法学部法律学科3年	安藤 基
法学部法律学科3年	三ヶ尻優作
工学部電子情報工学科3年	古賀智恵理
経済学部経済学科3年	赤星 果林
人文学部東アジア地域言語学科3年	矢野 有紗
工学部機械工学科2年	木下 公一
工学部社会デザイン工学科1年	前田 夢

C 班	
学部・学年	氏名
商学部商学科2年	鹿垣孝太郎
経済学部産業経済学科4年	粒田 直希
商学部商学科2年	安立 森
商学部商学科2年	興梠 啓祐
商学部商学科2年	隈 亜矢香
商学部商学科2年	諸岡あづ咲
人文学部フランス語学科2年	小畑 咲弥
人文学部フランス語学科2年	川元 美希
経済学部経済学科2年	大庭 麻喜

## 2

## 募集から活動報告まで

### 東日本災害ボランティア第3次福岡大学派遣隊スケジュール

募集期間	期間：4月30日（火）～5月20日（月）
第1回事前研修	日時：6月10日（月）18：10～19：30 場所：エクステンションセンター2階多目的ルーム
第2回事前研修	日時：6月17日（月）18：10～19：00 場所：7号館733教室
第3回事前研修	日時：6月24日（月）18：10～19：00 場所：エクステンションセンター2階多目的ルーム
第4回事前研修	日時：7月1日（月）18：10～19：30 場所：エクステンションセンター2階多目的ルーム
第1回破傷風予防接種実施	期間：7月8日（月）～10日（水） 場所：福岡大学病院
第2回破傷風予防接種実施	期間：8月7日（水）～9日（金） 場所：福岡大学病院
第5回事前研修	日時：7月9日（火）18：10～19：00 場所：エクステンションセンター2階多目的ルーム
第6回事前研修	日時：7月18日（木）18：10～19：00 場所：7号館741教室
参加費納入	期間：7月24日（水）～7月26日（金） 金額：20,000円 納入方法：学内の自動証明書発行機で納入し、受領証を学生課窓口へ持参する。

<p><b>ボランティア保険加入</b></p>	<p>期間：7月24日（水）～7月26日（金）                  保険料：720円                  納入方法：学生課窓口へ保険料を持参する。</p>
<p><b>第7回事前研修</b></p>	<p>日時：8月5日（月）                  清掃活動 場所：福大周辺 10：00～12：00                  救急救命講習 場所：学生部2階会議室 13：00～15：00</p>
<p><b>第8回事前研修</b></p>	<p>日時：8月20日（火）10：00～12：00                  場所：学生部2階会議室 A</p>
<p><b>結 団 式</b></p>	<p>日時：8月23日（金）13：00～14：00                  場所：学生部2階会議室 A</p>
<p><b>ボランティア派遣期間</b></p>	<p>日程：8月26日（月）～30日（金）                  場所：宮城県 南三陸町（活動拠点）                  内容：1日目 南三陸町到着 上山八幡宮にて安全祈願。                  2日目 全班合同で農地復興作業の予定だったが荒天のため作業中止。急きょ予定を変更して、南三陸町志津川中学校仮設住宅の除草作業の後、気仙沼市、陸前高田市を見学。                  3日目 A班仙台市若林区でがれき撤去作業。                  B班、C班合同で南三陸町にてがれき撤去作業。                  4日目 A班仙台市若林区でがれき撤去作業。                  B班、C班気仙沼市で仮設住宅訪問、学童保育。                  5日目 東北学院大学にて報告会の後にグループワーク。                  その後帰福。</p>
<p><b>ボランティア報告会</b></p>	<p>日程：12月20日（金）                  場所：福岡大学中央図書館1階多目的ホール</p>

## 3 被災地での活動内容

### 1. 現地到着日

#### 上山八幡宮 訪問

8月26日宮城県に到着した第3次福岡大学派遣隊は最初に南三陸町の上山八幡宮を訪問しました。この上山八幡宮は第1次、第2次福岡大学派遣隊から繋がりががあります。

上山八幡宮に到着して、まず私たちは被災された方々へ黙とうを捧げました。その後上山八幡宮の工藤真弓氏より紙芝居を交えて震災当時の様子などを読み聞かせていただきました。工藤真弓氏はこの紙芝居により震災の体験を伝え続けているそうです。

実際に津波の被害にあった方から初めて当時の様子をお聞きし、派遣隊一同の今回の活動への想いはより一層強いものとなりました。とても貴重なお話を聞かせていただいた上山八幡宮の方々に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。



上山八幡宮にて活動の安全祈願



犠牲者への黙とう



工藤真弓さんによる紙芝居



紙芝居を聞く派遣隊員の様子

## 南三陸町防災対策庁舎にて

宮城県南三陸町上山八幡宮訪問の後、防災対策庁舎を訪れました。

震災発生後、全員屋上に避難をしましたが屋上をも上回る津波に襲われました。防災対策庁舎だけでも多くの命が犠牲になりました。



## 2. 活動1日目

### 南三陸町町長表敬訪問

8月27日南三陸町長佐藤仁氏に表敬訪問をさせていただきました。

佐藤町長も実際に被災された一人で、震災時の状況を語ってくださいました。津波の様子を確認するため防災対策庁舎の屋上に上がったところ津波に流されかけたこと、その直後に雪が降り始め、偶然壊れなかったライターで火を起こしてみんなで集まって暖をとり、一命を取り留めたことなど、壮絶な体験談を語ってくださいました。また、南三陸町ではまた津波で大きな被害が出ないように、住民の居住区を津波が来なかった高台に移し、もともとの居住区であったエリアには工場などを作ることで被害を少なくしようと考えているともおっしゃっていました。

佐藤町長は、遠くの地、福岡から多くのボランティアが来てくれていることに対して、この震災が結んだ縁の強さを感じておられるようでした。

今回、第1次派遣隊からの繋がりを通し、このような表敬訪問をさせていただき、貴重なお話をお聞きすることができました。改めて、活動することで出来る人と人の繋がり大切さを感じました。



左から 西田直人（B班リーダー） 前田光太郎（A班リーダー兼全体リーダー） 佐藤仁町長  
鹿垣孝太郎（C班リーダー）

## 南三陸町志津川中学校仮設住宅での清掃活動の様子

南三陸町災害ボランティアセンター猪俣氏より志津川中学校仮設住宅を紹介していただきました。急な訪問だったにもかかわらず住民の皆様はとても優しく接してくださいました。仮設住宅の敷地内はいたるところに雑草が生えていたため、除草作業の手伝いをさせていただきました。



## 気仙沼市にて



第18共徳丸 津波によって港から約600mの地点まで流された（平成25年9月に解体された）



第18共徳丸前にある献花台

## 陸前高田市にて



この追悼施設は津波で流出した高田松原を使用して作られた



慰霊碑に祈りを捧げる学生たち



追悼施設にある千羽鶴 皆の心は一つ  
一日も早い復興である



陸前高田市「奇跡の一本松」



### 3. 活動2日目

#### 宮城県仙台市若林区での農地復興作業（A班）



ボランティア団体 ReRoots  
農業支援を柱として活動している



住宅地に埋まったがれきの撤去作業  
今後は農地として生まれ変わる



シャベルで土砂を掘り起こす作業  
割れた茶碗や箸などが出土して当時の生活を物語った



仙台市若林区荒浜の様子  
海岸沿いに防潮林があったがほとんどが津波で流された



ReRootsのメンバーとの集合写真  
福岡大学の学生だけではなく様々な人が協力しての  
作業となった

## 宮城県南三陸町での農地復興作業（B班、C班）



土砂に埋まったがれきの撤去作業



掘り起こしたがれきの選別作業



選別後のがれき。これがすべて土中にうまっていた  
これでも冰山の一角である



土砂に埋まった大型のがれきを掘り起こしている様子



がれき撤去作業中に出てきた子供のおもちゃ  
津波は思い出も何もかも飲み込んだ



横一列に並び、土中に埋まったがれきを掘り起こす  
1日かけて5メートル進むのが精いっぱいだった

## 4. 活動3日目

### 宮城県仙台市若林区でのがれき撤去作業（A班）



ReRootsスタッフによる挨拶



運んできた土砂からがれきを取り除く作業



道具を使った土砂の選別作業



選別後の様子（手前が砂利やガラス片、奥が砂）



活動終了後の挨拶（ReRootsスタッフと本学学生）



全国から集まったボランティア参加者との集合写真  
国籍を超えて復興への想いは一つとなった

## 宮城県気仙沼市南最知仮設住宅での活動（B班、C班）

気仙沼市南最知仮設住宅を訪問させていただきました。私たちが仮設住宅の方々を元気にしたいという思いで訪問しましたが、元気をもたらしたのは私たちのほうでした。住民の皆様はとても明るく前を向いて復興に取り組んでいました。しかし、お話を聞いているときに見せた悲しげな表情は忘れられません。私たちの今回の活動で、少しでも仮設住宅の方々が元気になる手助けができたのなら幸いです。



### 宮城県気仙沼市面瀬小学校での学童支援（B班、C班）

昨年に引き続き、宮城県気仙沼市の面瀬小学校を訪問させていただきました。皆でクイズ大会をした後に面瀬小学校の体育館をお借りして、ドッジボールや鬼ごっこをしたりして、目いっぱい子供たちと遊びました。最後に締めくくりとして、派遣隊の木下君のギター演奏に合わせて皆で童謡を歌いました。子供は常に前を向いて生きています。改めて子供の強さを知った活動でした。



## 5. 東北学院大学交流および、帰福日

### 宮城県南三陸町上山八幡宮清掃の様子

福岡大学派遣隊結成当時からお世話になっている上山八幡宮を清掃している様子です。雨が降っている中の作業でしたが、派遣隊一同感謝の意を込めて、一生懸命作業をしました。



### 宮城県仙台市東北学院大学での様子

東北学院大学ではこれまでの活動の成果を報告しました。その後、東北学院大学、関西学院大学の学生とグループディスカッションを行い、これまでの活動の成果やこれからの災害ボランティアへの取り組み方について各々の意見を出し合いました。短い時間でしたが、とても内容の濃いものとなりました。



## 4 派遣隊員レポート



# 1. 学生レポート

## 【A班リーダー】 前田 光太郎（法学部法律学科） 全体リーダー

2011年3月11日、日本を恐怖に追いやった東日本大震災が発生してから約2年半が経過しました。福岡大学では、震災が起きてから毎年隊員を募り、今年で第3回目の派遣隊が結成されました。

今回私が第3次福岡大学派遣隊に参加した理由は、昨年行われた第2次福岡大学派遣隊に参加したことが大きなきっかけでした。初めて訪れる被災地では、人が住んでいた面影はなく、大きな岩が転がり潰れた車が山積みになっている無残な状況でした。今までメディアを通してしか被災地の状況を知らなかった私にとって、そこでの光景は衝撃的で今も鮮明に蘇ります。そういった経験を通し、震災が起きたという事実を人々の記憶から風化させない、させたくないという気持ちが生まれると同時に、もう一度被災地を訪れ被災地の今を知ろうと思い派遣隊への参加を決意しました。

私たちは、現地に着いてまず第1次派遣隊から繋がりのある南三陸町の上山八幡宮を訪れました。黙祷をささげ、宮司さんのご息女である工藤真弓さんによる震災の様子を物語った紙芝居の読み聞かせをしていただきました。震災の猛威や虚しさが絵と言葉により心に伝わり強く響きました。その後、工藤さんとお話しさせていただき、その中で「目には見えなくても、また遠くて現地に行けなくても、現地のことを思い祈るだけで、亡くなった方々や現地の方々にその思いはきっと届きます。」というお言葉をいただきました。震災を受けた方々の力になるために、つい現地に行くことばかりを考えていた自分にとって、この言葉を聞いたとき、九州に帰ってからも現地のために出来ることを見つけることができ、救われたような気持ちになりました。

翌日から本格的な活動が始まり、私たちの班は体力活動を主に行いました。活動1日目は、昨年もお世話になった「南三陸町災害ボランティアセンター」のもとで活動を行いました。午前中は雨のため、屋内で震災当時の様子や今後の展望等のお話をして下さり、その後、佐藤仁町長とお会いさせていただきました。町長に活動に対する意気込みを伝えた上で、激励の言葉をいただきました。その言葉を胸に、午後からは仮設住宅付近の除草作業を行いました。

活動2、3日目は、仙台市内にある学生主体で運営する団体「ReRoots」のもとで活動を行いました。ここでは、現地の学生以外にも県外や外国から訪問した団体が多く参加しており、住宅地跡の土起こし、がれきや土砂の分別等の活動を共に協力しながら行いました。活動の中で、多くの方々とお話をすることで、一人一人が抱く震災に対する思いを聞くことができ、新たな価値観や視野を広げることが出来ました。

最終日には、東北学院大学に訪問し現地でボランティア活動を行う学生を交えたワークショップを行いました。このワークショップは今までの派遣隊にはない企画であり、普段関わることのない東北の学生と交流することが出来る貴重な機会でした。私たちと同じ世代の学生が行っている活動はとても興味深く、それぞれが本気で地元東北を復興させたいという熱意が伝わり刺激を受けました。ワークショップを経て、地元を良くしたいと考えている学生の姿を見ることで、私自身も地元九州のことについて考えるきっかけにもなりました。

震災が起きて約2年半が経過した今もなお、私たちの見えないところで沢山の人手を必要としている場所が多く存在しているのが現状です。被災地に行けなくても、九州にいても、現地の方々の直接力になれなくても、出来ることはあります。私自身も出来るだけの活動を続けていきます。そして何よりも、震災があったという事実は決して風化させてはいけません。



最後に、今回第3次福岡大学派遣隊を通じて、大きく成長させてもらおうと同時に、学生生活で最も貴重な経験をさせていただきました。第3次福岡大学派遣隊に関わって下さった全ての方々に感謝します。ありがとうございました。

### 高橋 美帆（人文学部英語学科）

2011年3月、テレビから流れるニュースを見て、何か自分にできることはないかと考え、募金活動に参加しましたが、どこか「他人事」として動いていることに気づき、自分の足で現地に立ち、自分の目でしっかりと現状を見たいと思うようになりました。今回5日間にわたり宮城県南三陸町を中心にボランティア活動をさせていただきました。私はこれまで二年半、被災地を、メディアを通してしか見ていなかった為に、完全にではありませんが、復旧作業はほとんど終わっているのだろうと思っていました。実際に、仙台空港に着くと、建物はきちんと整えられ、空港を出てからも、澄んだ空気、きれいにされている花壇、道があり、とても津波が襲ってきた所などとは感じず、福岡よりもきれいで素敵な所だと感じました。しかし、バスで滞在先のホテルがある南三陸町へと向かっている時、だんだんと建物や花が無くなり、コンクリートの塊や草が増えていくのが分かりました。私たちAグループは、体力作業がほとんどだったのですが、体力作業をする中で、掘り返すたびに出でくるがれき、食器、そして角を削られた大きな丸石などを見ると、今掘っている場所に人が住んでいたのだ、と感じるとともに、辛く、心が痛みました。そして、今でもこのような現状にあり、被災された多くの方が、家も建てられず仮設住宅暮らしだということを、日本で、そして私たちと同じ年代の人がどれだけ知っているのだろうか、もっと自分の国で起こったこととしてしっかりと受け止め、考えていかなければならないのではないかと考えました。私は今回「ボランティア」という言葉の意味を、活動を通して、「何かをしてあげる」のではなく、「できることを少しでもさせて頂く」ということだと学びました。私が丸一日かけて土を掘り進めた距離はたったの3mでした。一人ひとりの出来ることは少ないかもしれませんが、多くの方がすればあっという間に終わるはずです。学んだことをしっかりと伝え、私自身もこの経験を生かしていきたいと思います。

### 兼子 大輝（経済学部経済学科）

このたび、私は第3次福岡大学派遣隊として、東北へボランティアに行ってきました。期間は2013年8月26日から30日までの5日間でした。ホテルは南三陸町にあるため、主に南三陸町で活動をし、28・29日はReRootsというボランティア団体と共に仙台市若林区で活動をしました。

26日は初日で移動日ということで、ボランティア活動はしませんでした。上山八幡宮を訪れ神主さんのお話と紙芝居を聞かせていただきました。私は今まで想像していた地震、津波の被害や、復興への思い、考え方の違いに気づくことができ、非常に良い体験ができました。上山八幡宮の方に感謝しています。

27日は、南三陸町でボランティア活動をする予定でしたが、急遽雷が鳴りボランティアが中止となってしまったため、南三陸町災害ボランティアセンターの方の震災当時の様子のDVDを見ました。その後、何か手伝えることはないかということで、南三陸町災害ボランティアセンターのご紹介で、仮設住宅の草取りをさせていただくことになりました。草取りをしていると仮設住宅にお住まいの方とお話を

する機会が生まれました。とても明るく接してもらいました。仮設住宅の問題や復興の問題などを教えてくれました。その後はバスで奇跡の一本松や、気仙沼の打ち上げられた船などを見に行き、津波の恐ろしさを実感しました。

28・29日は、ReRootsというボランティア団体でボランティアをし、初日は土に埋もれたがれきを取り除く作業、二日目は土と砂を分ける作業をし、どちらも農地復興を目標として活動しました。初日の作業は一日作業しても5メートルほどしか進まず、気の遠くなるような作業を毎日やっているのかと思うと何とも言えない感情でした。二日目は単純作業でしたが、なかなか進まず大変な活動でした。

30日は、上山八幡宮で清掃活動を行い、その後東北学院大学の学生と交流しました。

私はこの5日間を通してボランティア・復興・伝えることの大切さなど様々なことが今までの考えと変わりました。復興に関して書くと、行く前の考えでは元に戻すという考えが強かったですが、行くと皆さん復興に対しての思いがそれぞれ違い、前よりも良くしようという考えが強いと感じました。そこで私は復興したという結果が大切ではなく復興へのプロセスが大切だと感じました。皆がそれぞれ考えた復興を足し合わせていくと必ず前よりも良い復興が出来ると思います。私も結果にとらわれずプロセスを大事にし、元に考えていた結果を越すものを構築したいと思いました。

## 田村 聡浩 (商学部経営学科)

私がこのボランティアに参加させていただいた理由は、2年半前に起こった日本最大級の震災をテレビで見て、被災された方々の事を想うとやり切れない気持ちになったからです。そこで「自分も何かしたい」、「人の役に立ちたい」、「テレビや新聞でしか見たことのない被災地を自分の目で見て確かめて、感じたい」という思いがあったからです。実際に被災地に行き、主に拠点となったところ、宮城県仙台市、南三陸町は大きながれきはほとんどなかったものの、2年半たった今も復興は進んでいないと感じました。また、住宅地跡をスコップで掘り起こし、がれき撤去を行う際に、まだまだ小さながれきが掘り起こされて、津波で海から流されてきたと思われる大きな石、住宅の瓦、鉛筆などを見つけ、津波の恐ろしさ、震災の恐ろしさを改めて実感しました。また、日常を奪われた現地の方々の思うと本当に心が痛みました。私がこの5日間の体験で思ったことは、震災から2年半ほど経過しましたが、まだまだ復旧すらしていない地域があることを知りました。また、復旧と復興の違い、これは具体的に復興とは昔のものをベースに新しい町を作っていくこと、また復旧、復興するためにはがれきや石の撤去だけではなく、被災された方々の心のケアが必要であるということ、宮城県で津波の被害が大きかった地域では、復旧から復興へ、とても苦しい時期であり、現状をどう打開し、将来に向け、街づくりの計画を考えなければならないことを学びました。また、宮城県仙台市にあるボランティア団体ReRootsさんにお世話になりましたが、そこでは同世代の大学生が多く在籍していて、毎日こういった宮城県の復旧、復興のため、日々がれき撤去などを頑張っている人たちがいることを伝えていかなければならないと感じました。最終日には東北学院大学、関西学院大学の学生との交流がありましたが、そこで東日本大震災について討論をしましたが復興に対する地元の方々の熱い思いが伝わってきました。この討論会で心に残ったことは、風化を防ぐこと、ボランティアにおいて求められるニーズに対応することは重要だけど、それだけではなく視野を広げていくことが大切であるということが心に残り、今後自分の人生における教訓にもなりました。この強い思いが積み重なって復興に繋がっていくのだと改めて感じました。この5日間貴重な経験をさせていただいた学生課の方々、メンバー全

員に本当に感謝しています。この5日間で学んだことを多くの人に伝えていけるようにしたいです。

### 樗木 公詞（商学部貿易学科）

私が東日本大震災のボランティアに参加しようと思ったきっかけは、私が海外留学中に外国の方から震災について聞かれた時に何も答える事ができなかった事が悔しく思えたからです。自国で起こった未曾有の大震災について、テレビで見て、その情報しか知らなかった私は、自分の体で体感して初めて震災について知る事ができるのではないかと考えボランティアに参加する事を決意しました。

そして実際に現地に行ってみて改めて被害の深刻さを知りました。残っていたものは役場の人が最後まで避難を呼びかけ続けたという防災対策庁舎、流された家の基盤、海から流されてきた船。その場所からは海は見えませんでした。今、自分が立っている場所まで津波が到達したんだなと考えると恐怖さえ感じました。また、周りを見渡すとがれきはほとんど撤去されて残ってはいませんでした。地面を掘ってみるとがれきやガラス、お皿、箸、洋服などの生活用品がたくさん出てきました。十数人で5～6時間作業して一人3～4メートル進むのがやっとでした。

別の日には仮設住宅に訪れ、そこに住んでいる方とお話をする事ができました。そこで印象に残った言葉は「被災者とはもう呼ばれたくない」「頑張れという言葉は嫌い。もう今以上に頑張る事はできないから」という言葉でした。励ましのつもりという言葉でも相手にとっては嫌な言葉でしかないと感じ、相手の気持ちになって発言するという事も改めて学びました。また、人と話す事が一番の元気の源になるともおっしゃっていて、やはり人を元気にさせるのは人なのだと思います。

現地ではまだまだ支援が必要とされています。復旧にも十年かかるかもしれない。復興にいたってはもっと時間がかかると思います。私たちがしなければならぬ事は東日本大震災を風化させない事です。多くの人に今ある現状を伝え、広めていく事が現地の復旧、復興につながると思います。そしてこの経験をさせてもらって改めて命の大切さ、生きていく事の素晴らしさを感じました。

### 安武 かおり（商学部貿易学科）

私はずっと自分自身で現地へ足を運び何か自分にできることをしたいと思っていた。こうやって福岡大学へ入学して実際に現地に行けたことは本当に感謝である。

宮城県南三陸町へ行くとそこには草原が広がっていた。何もなかった。津波の悲惨さを物語っていた。近くにある上山八幡宮で参拝し神主の方のお話を聞き、私達に実体験を基にした紙芝居を読んで聞かせてくれた。涙が止まらなくなった。人は人に生かされていることを強く感じた。そして、現状に負けず、懸命に生きている姿に生きる強さを感じた。私が元気をもらえた。仮設住宅にも訪れ、草取りをさせてもらった。仮設住宅に住むおばあちゃん方は私達が来るのが嬉しいと言ってくれた。「いつまでも落ち込んで仕方がない。1日1日を楽しんで生きる。明日が来ることに感謝」おばあちゃんが言っていたこの言葉に私は感銘を受けた。

学生ボランティア団体ReRootsでの体験はとても貴重な体験だった。信頼しあえるグループの仲間と声を掛け合いながら、がれきの撤去処理に取り組むことができた。ReRootsでの活動2日目には留学生と協力して楽しく活動することができた。地道な活動をしていく中で復興は決して楽なことでも簡単なことでもないと思えた。東北での出逢い、そこで感じた1つ1つの思いを胸にこれから自

分自身、色々な壁を乗り越えて行こうと思う。また、東北へ行き、一人でも多くの人を元気づけることができたならそれが東北に住む人の明日の元気に繋がるかもしれない。今回のボランティア経験を通じて、人と人とのつながりの大切さ、素直に人のために行動する素晴らしさを改めて深く感じる事ができた。たくさんのかんことを感じる事ができた東北での日々に感謝している。

### 佐藤 亜佑美（スポーツ科学部スポーツ科学科）

私は今回初めて、震災後の宮城県を訪れました。到着してまず、目に飛び込んで来たのは積み上げられた土と集められたがれきしかない土地が広がった光景でした。私は、その何も無い閑散とした風景に衝撃を受けました。そして“言葉にできない”感情が押し寄せてきました。

私たちの班は、2日間“ReRoots”という仙台市若林区のボランティア団体で、がれき撤去と土と石の選別作業の手伝いしました。若林区は農業が盛んな地区だったそうです。しかし、がれきが埋まった土地だと作物が育たない為、農業を再開できない方々がまだ沢山いるという状況でした。がれき撤去では土を掘り起こし、埋れたがれきを取り除いて行く中で、生活用品なども見つかりました。作業は1日で3m進むのがやっとでした。選別作業は、積み上げられた土をふるいにかけて石を取り除くといった、とても地道な作業で、体力的にも大変でした。これらの作業が全て終わるのに、この先どれだけ時間がかかるのか。更に年々ボランティアは減って行く現状。ある程度“復旧”は終わってきているけれど、“復興”の段階では停滞しているという状況は、実際に足を運ばなければ分からなかった事でした。

私は、この5日間で本当の意味での復興とは何だろうと考えさせられました。まだまだ、農業や漁業をはじめ産業は厳しい現状。また、被災された方々の心のケアも必要。沢山の問題が未だに残っていました。しかし、そんな中でも現地の方々は笑顔で前を向いていました。私は中でも「いつまでも、被災者でいてはいけない。前にすすまなきゃ。」と話して下さった仮設住宅に住むおばあさんの笑顔が一番心に残っています。

この5日間、私たちのできた事はほんの僅かですが、本当に貴重な体験をさせて頂きました。そして、逆に私の方が現地の方々に元気と勇気ももらいました。私たちにできる事は限られていますが、少しでも復興のお手伝いができるようにまた来年も東北へボランティアに行きたいと思います。

### 伊達 綾子（スポーツ科学部スポーツ科学科）

今回、第3次福岡大学派遣隊として東北へボランティアに行かせていただいたことで、今まで知らなかった東北の現状、東北の方々の明るさや強さ、共に活動をさせていただいた人々との新たな出会いなど、今までに無い様々な経験をする事ができました。これは私自身が自ら現地へ足を運んだからできたことであり、テレビや話を聞くだけでは感じる事ができなかったものだと思います。福岡大学という集団の中であつたからこそ素敵な仲間の皆さんと共に過ごせたのだと思います。また安全に活動できたことに心から感謝しています。

それでは活動内容について書きたいと思います。東北には5日間滞在しました。1日目は、飛行機とバスの長時間移動の後、上山八幡宮に紙芝居とお話を聞きに行きました。

仙台空港には津波到達地点等が柱に記録されており、自分達の身長2、3倍もの高さに恐怖を感じました。そしてバスで上山八幡宮へ移動している途中にもがれきの山や、流されてしまって何も無い

野原など、震災の被害の大きさを物語るものがたくさんありました。上山八幡宮さんでは神主さんが紙芝居を通して当時の状況について涙ながらにお話ししてくださり、とても心が痛くなりました。ホテルへ帰る途中テレビでよく見ていた防災対策庁舎にも訪れ黙とうをしました。自分の命を犠牲にして住人へ危険を知らせ続けていた方々のことが頭に浮かび自然と涙が出てきて、それと同時にこの東日本大震災でまわりの人々を助けるため、犠牲になった人たちがたくさんいたことを思いました。

2日目は作業予定でしたが天候が悪かったため、予定を変更して南三陸町災害ボランティアセンターにお話を聞きにいきました。そこで復旧と復興について考え、復旧は被害の後をきれいにすること、ゼロに戻すこと、復興はゼロからまた元の姿、更に良い姿に戻していくことであると再確認しました。現段階では復旧は大分終わったものの復興はまだまだであるという事を知りました。午後からは仮設住宅を訪れ草取りをさせてもらいました。そこで仮設住宅の方々とは直接お話する機会がありました。仮設住宅の方々には本当に明るく、逆に私達が元気をもらう程でした。「ずっと暗かったらキリがないから」と前を見て過ごされている皆さんはとても強いと感じました。

3、4日目はボランティア団体のReRootsさんと一緒に活動させていただき、再び農作業をすることが可能な土地にするため、土の中のがれきを掘り起こす作業をしました。土を掘り起こすと、茶碗や箸等の日常生活で使われていたものがでてきて、この震災によって当たり前の生活が奪われてしまったということを実感しました。十数名で活動したのですが、終わってみると作業が進んだ範囲は数メートル程で自分達の無力さと復興までの道のりが長いことを知りました。

テレビでは大分復興は進んでいるということが報道されているが、まだまだ人手は足りず、やることもたくさんあるということを感じました。また、4日目の活動では、外国の方と一緒に作業することができ、日本だけではなく世界中の人たちがこの震災のことを考えていることが分かり嬉しく思いました。

最終日の5日目は、初日にお世話になった上山八幡宮さんのお掃除と、東北学院大学で今回の活動の報告会をしました。報告会ではグループリーダー達が5日間の活動を発表し、現地の大学生や他の団体さんの紹介や活動、モットーなどを聞きました。自分の考えをしっかりと持って、様々な活動をされている方々はとても素敵で、逆に何もしていない私が恥ずかしくなったのを今でも覚えています。全国で色々な活動をしていることを知り、とても刺激を受け、私も、これから更に活動していきたいと思いました。

5日間の活動を通して、全てが流されて何も無い土地や、いろんなものが混ざったがれきや多くのものを飲みこんでしまった海や、被災された方々の笑顔など、多くのものを私の目で見ることができました。TV画面を通して現地の状況は知ってはいたものの、実際に見ると鳥肌がたちとても怖かったです。私達の活動は本当に小さな力にしかたけなかったけれど、また来年も再来年も現地へ行き、活動を続けていきたいと考えています。私達に出来ることは東北の事を考えること、思い出すこと、そして自分自身の人生を一生懸命過ごしていくことだと思います。とても貴重な経験ができ、そこで感じた気持ちをこれからの活動に活かしていきたいです。

## 【B班リーダー】 西田 直人 (法学部法律学科)

私は今回東北で5日間ボランティアをさせていただいて一番に感じたことがあります。それは、被災された方々が本当にあたたかく私たちを受け入れてくださったということです。

現地の状況はまだまだ厳しいにも関わらず、現地の人々にあたたかく笑顔で迎えていただきました。私たちは被災された方々に笑顔になっていただく目的でこの東北ボランティアに参加させていただきました。しかし、逆に私たちが元気をもらい笑顔にさせられました。

被災された方々一人一人が大変な経験をされたと思います。それでもその当時のことを笑顔で笑い話のように話してくださった被災者の顔を今でも忘れません。私はその姿を見てこれから私にどんなに辛いことがあっても、被災された方々が強く笑顔で乗り越えられたように私も乗り越えていこうと思いました。それくらい被災者の方々の笑顔の姿が印象に残っています。

最後に、ボランティアのニーズがまだまだあるにも関わらず実際にボランティアに参加する人数が減ってきているのが現実です。そこで、この東北ボランティアに参加させていただいた私たちがまず福岡に帰ってきてすべきことは、東日本大震災という誰もイメージできなかった大震災がこの日本であった事実を日本中が忘れないためにも、実際に現地に行った私たちが現地での体験や現状、素直に感じたことを家族や友達に伝え続けていくことが重要だと考えます。また、メディアが伝える現状や情報ではなく、被災者のリアルな声や訴えを伝えなければならないと考えています。これらのことは、実際に東北に行った私たちだからこそのことであり、一人でも多くの人に伝え一人でも多くの方が私たちのように東北ボランティアに参加してくれる人を増やすこと、それが私たちの最大の使命でありボランティアであると考えます。それと、どんなところにおいても常に被災地のことを忘れず、思い続けることが一番大切だと感じます。

## 矢野 有紗 (人文学部東アジア地域言語学科)

東北地方で地震が起きた時、テレビで放送された津波や被災地の映像に心を打たれました。車が流された人、家が壊された人、家族、友達を失った人、多くの人に大きな傷を与えた津波に恐怖を感じました。あれから約3年経ちますが、現在はどのような状態なのだろうか、直接自分の目で見て、そして少しでも復興の力になりたいと思い参加しました。

講話を聞き被災地のその時の現状を学ぶと共に、仮設住宅を訪問し除草作業や皆でうちわを作ったりしました。小学校を訪問した時は、お菓子を食べたり、ドッジボールを皆でしたりしましたが、この子供達はあの津波を経験したのかと疑いたくなるほど、あまりにも元気があり、逆に元気をもらうほどでした。

5日間の活動の中で、私が一番衝撃を受けたのは、がれき撤去の作業でした。もう3年も経つのだががれきなどまだあるのだろうかかと正直初めは考えていました。しかし、土を少し掘っただけで色々なものが出てきました。生活用品や家の一部であったろう瓦、大きいものだとガードレールなど一人二人では掘り起こせないようなものもあり、このような大きくて重たいものでも簡単に破壊してしまう津波の恐ろしさを実感しました。5時間かけても3メートル位しか進まないほど、本当に沢山の物が埋まっていました。

ボランティアを終えて、震災発生当初に比べると道路が舗装されていたりコンビニがあったりと綺麗になっているところも見られましたが、復興にはまだまだ多くの時間と人員が必要だと感じました。

現在はボランティアの数が減少しているということなので、まずは周りの友達にここで学んだことを話し、そしてそこから行動に移してくれる人を増やしていくことから始めようと思います。

### 安藤 基（法学部法律学科）

2013年8月末、私は初めて被災地である宮城県本吉郡南三陸町を訪れた。被災地を訪問するにあたり、様々なニュースや新聞記事を見てきた。ある程度は復興されたというニュースを真に受けて訪問した私は、驚愕した。元々、住宅地として栄えていた街には、窓がなく柱の数も少ない高野会館跡地と、鉄筋だけ残った防災対策庁舎のたった2つの建物しか残っていなかった。震災から2年半も経ったとは思えないような光景がそこには広がっていた。私は、失礼ながらその時初めて津波が怖くなった。と同時に、少しでも現地の人々の力になりたいと強く感じた。おそらく一緒に訪問した仲間達も、そう思ったに違いない。その日から、皆の目の色も変わり、自分達が計画してきた活動に取り組み始めた。計画2日目は悪天候のため当初計画していたことを断念したものの、3日目のがれき撤去は皆が集中して自分が任された作業に取り組んだ。私たちがその日行った作業は微々たるものだったかもしれない。しかし、私たちに精いっぱい現地の人たちのお手伝いできたことは一生忘れることはないだろう。

私は4日目の仮設住宅訪問の際、すごく驚いたことがある。それは、現地の人たちが笑っていたことである。笑うのは当たり前だと思う人がほとんどと思うが、私は被災地をめぐる中で笑えなくなっていたので、現地の人たちの精神力に心を打たれた。私も、まだまだ未熟だなと実感させられた。

今回は、私は被災地を訪れ、お手伝いをさせていただいたことで人として一回りも二回りも大きくなれた気がした。しかし、私が東北での体験を話したところでボランティアに行った方が良くと勧めるのは間違いだと思うので、もしこの体験談を読んでボランティアをしたいと共感していただければ、その時は是非行動を起こしていただきたい。

### 三ヶ尻 優作（法学部法律学科）

震災があった当時、私は震災による被害をテレビや新聞等を見て、ただ言葉を失っていただけでした。しかし、二年半が経った今、改めて自分に何かできることはないかと考えボランティア派遣に参加することを決めました。正直、最初の方は漠然とした考えでしか参加していませんでしたが、実際に現地に足を運んでみると津波の恐ろしさを物語る想像以上の光景を目の当たりにし、少しでも被災地の復興に貢献しなければならないといった責任感や使命感のようなものが湧き上がってきました。

わたしは5日間のボランティア活動を通し、たくさんの現地の方々と触れ合っていく中で、共通して感じたことがあります。それは震災を乗り越え笑顔で前向きに頑張っていこうとする現地の方々の姿です。そんな力強く生きていこうとする姿に心打たれ、ちょっとやそっとのことで悩んでいる自分を情けなく感じ、もっと前向きに頑張っていかなければならないと強く感じました。また、復興に向けて協力し、団結しあう現地の方々の姿に人と人とのつながりの大切さを学び、人の底力を感じました。最近ではメディアでの報道が減り、震災の記憶の風化が進み、被災地は忘れられているような気がします。ボランティアセンターで話を聞いた中で「被災地を思うだけでもボランティア」という言葉がありましたが、まずは被災地に、そしてボランティアに意識を向けることが大事だと思います。また実際に被災地でボランティア活動を行った私が今できることは、より多くの人々に被災地の現状、感

じたこと、思ったことを伝えていくことです。そうしてたくさんの人に関心を持ってもらうことで復興支援に繋がればと思っています。

最後に、いつ何が起きてもいいように備えておくことが大前提ですが、常に感謝の気持ちや思っていることを素直に伝えることが大事だということをこのボランティアをきっかけに改めて実感することができました。派遣隊の仲間に出会えたこと、現地の方々に出会えたことに感謝し、今回できた貴重な経験を糧にこれからの生活に活かしていきたいです。

### 山口 志保美（法学部経営法学科）

東日本災害ボランティアに参加するにあたり、この活動が少しでも被災地復興の力になることと被災者やボランティアの方々の心に元気を届けたいという思いを持って参加させていただきました。2011年3月11日の東日本大震災から2年半。メディアに取り上げられることもだんだんと少なくなり、人々の目も遠ざかっているように感じます。しかし、この震災はわたしたちの記憶となり、大きな傷跡を現地と心に残しました。

わたしは昨年も第2次派遣隊として被災地を訪れました。昨年、参加させていただいた際、長期に渡る支援が必要であることを強く感じ、また、「普通の生活」に対する新たな価値観を得ました。昨年、わたしが見た被災地と再び同じ地を見て、僅かながら復旧復興工事が進んでいることを感じました。また、被災者の方との交流の中で、明るさや前向きさも力強く感じました。

昨年は主にながれき撤去と学童支援を行いました。今年は被災者の方とよりふれあいたいというわたしたちの思いで、仮設住宅訪問をさせていただきました。そこに住んでいらっしゃるおばあちゃんたちと交流をした際、何度も何度も「ありがとうね」と、おっしゃいました。わたしたちの活動はおばあちゃんたちにどのように映っているのかわかりませんが、このおばあちゃんたちの「ありがとうね」に込められた感謝と期待を無駄に出来ないと思いました。

わたしたちの若い力はおばあちゃんたちのために、被災地のために、日本のために、全ての未来のために尽力しなければならないと思いました。わたしたち一人ひとりの活動が「未来へ繋ぐ」キッカケになりたいです。

### 赤星 果林（経済学部経済学科）

約2年半前に震災が起きたとき、毎日のように、津波が町に飲み込まれている様子がニュースで放送されていたのを覚えています。しかし、今となっては、テレビや新聞で取り上げられる機会がほとんどなくなってしまいました。でも、震災の事を決して風化させてはならないと思います。私は風化させたくないという想いと自分に出来ることをすることで少しでも復興の役にたきたいと思い、ボランティアに参加しました。

私は現地に行ったとき、まず建物がなく平地が続いているという光景に驚きました。少しずつ復興へ向かってはいるもののこんなに何も無い状況だとは思ってもみませんでした。私達の班は活動日の2日目にがれき撤去をしましたが、作業をしていく中で衣類やお茶碗の破片など日用品がたくさん出てきました。今は荒地地となっていますが、以前はたくさんの人々が生活していたのだと改めて実感するとともにとても悲しい気持ちになりました。また、南三陸町のボランティアセンターの方の講話で、



「津波から受ける衝撃は10トントラックがぶつかってくるような感じ、わずか50cm程の水位でも流されてしまう」と聞きました。以前から津波は恐ろしいものだと分かっていましたが、ぼんやりとしたイメージしか持っておらず、こんなにも威力があるものなのだと知って、改めて津波の恐ろしさを知りました。

仮設住宅での清掃、交流、そして、学童支援も行いましたが、現地の方々はすごく前向きで笑顔でした。特に子供達は元気が良く私達が振り回される程はしゃぎまわっていて、私自身がたくさんの元気ももらいました。

現地に行って活動するだけがボランティアではなく、福岡で自分が今回経験したことを多くの人に伝えるということや、東北産の食品を買うということもボランティアであるのだと学びました。私にできることは本当に小さなことですが、これからも東北の方々力になれるよう支援していきたいと考えています。

## 木下 公一（工学部機械工学科）

私たちは8月26日から8月30日にかけて、2011年3月11日に発生した東日本大震災の被害を受けた宮城県へ支援とメディアでは情報公開されていないこととかを少しでも周囲の人に伝えるために行ってきました。仙台空港についてバスに乗り込み、宿泊先の南三陸町に到着する間に災害前と災害後の写真集を皆で回し読みをしました。ある程度読んで窓のほうに目を遣ると流されて電信柱に衝突したような小さな小屋がありました。正直、悲惨でした。その日16時頃、上山八幡宮に行き、神主さんから当時の様子と震災後に気付いた事をいかして今後の津波対策としての活動をしていて、地域住民に積極的に参加してもらっていると聞きました。その後は防災対策庁舎を見に行き、津波がくるまで最後までアナウンスしていた女性職員に線香をたてて、この方の勇気ある行動に敬意を示しました。建物は鉄骨だけしか残っておらずそれだけでも十分に破壊力が窺え、近くの森林のうち何本かは葉っぱが塩害で腐っており、そのことから津波の高さを推測するとその時の逃げる人たちの恐怖、悲鳴が少しきこえました。デジャブです。まるでその時私もいたかのようでした。2日目の南三陸町災害ボランティアセンターでは猪俣さんからとても貴重なお話をうかがうことができました。まずボランティアの組織形態から実際の様子などの動画、それにデータまで事細かく説明されたのですが、そこで少し驚いたのが、ある3つの町の被害データで津波の高さが一番高い所と最も低い所とでは、死亡行方不明者数が逆だったということでした。確かに最も低い所で20メートルでしたがそれでも高低差は6メートルもあります。それだけで2000人近くの数が違っていました。とにかく高い所に逃げるということを教わりました。また、猪俣さんもその経験から自分なりに出した対策方法をもって、次に予想される津波の被害のため沿岸に面している都道府県を飛び回って講演会をしているそうです。3日目にはがれき撤去作業を行い、ボランティアセンターの方々にはがれき撤去には工場から漏れた薬品が土に染み込んでいるため、事前にある程度安全性を確認するなど目に見えない危険性があることを教わりました。民家の建設問題にともない仮設住宅の建設場所など津波の被害を受けた建物の撤去問題とかもあるそうです。4日目は仮設住宅の訪問と小学校の訪問です。正直これが一番嫌でした。私自身が人見知りなためすぐに他人と馴染めません。一番嫌でした。しかし、向こうの方は多分私たちには見えない所でかなり苦勞をされていると思います。けれどもそれを見せないように必死で明るくふるまっていたため、むしろこちらが元気をもらい、私たちはその日の夜に行った最後の反省会と翌日の東北学院大学生との交流で、自分たちの大学生活の中で、継続性の意味と

こういった社会に出たらなかなか体験できないことを経験することで大学の教育での必要性とこれから先の需要さらに供給が見えてくるとも思いました。今回のボランティアは自分のためでもあり、被災者の方の力に少しでもなれたこと、そしてこの文を読んだ人がボランティアに参加する気が出てくれることを望んでいます。

## 古賀 智恵理 (工学部電子情報工学科)

被災地のことを忘れず、震災のことが風化されつつあるこの現状の中で被災地で見たこと、感じたことを伝えていくこと。これが私たちの福岡に帰ってきてからの課題であり、できる事であると考えます。震災がおきて初めて現地に行った私だが、行って最初に感じたことは「本当にここに家や街があったのだろうか」である。現地はがれきなどは大体片付いていた。しかし草が生い茂っており、まるで空き地がいくつもあるようだった。被災前の住宅地には住宅は建てないとのことだったが、一部を見るだけでも復旧は進んでいても復興にはまだまだ時間がかかるという事が理解できた。私たちが主に活動したのは3日間だったがその3日間の活動は被災地の復旧、復興活動の中で本当にわずかなものであると思う。だけどそのわずかな活動の中で関わった人、お世話になった人は沢山すぎるくらいいて、改めて人と人との繋がりがこの支援活動の中で重要な役割を果たしていると感じた。被災地の方々は悲しい顔を私たちに見せず、前に進んでいて今も復興の為に新たなプロジェクトに取り組んだり、作業をしたりと行動している。私たちは頻繁に被災地に行くことはできないし、そのお手伝いをすることもできない。だけど「現地に行かなくてもできる事」これについて考える事はできる。被災地の事を考えること、東北産のものをスーパーなどで買うこと、友人や家族などにボランティアで見たこと学んだこと、現地の写真を見せること。このような何気ないことであるが、これを続けることで少しでも沢山の人が被災地のことを知り、関心興味を持ち、それがでっかくなって繋がりになって被災地の方の支援に少しでも役に立てば、被災地に行かなくてもできるボランティアとして成立するのではないか。以上が被災者の心のケアが重要となっている現地に行って学び、感じたことである。

## 前田 夢 (工学部社会デザイン工学科)

私は、東北へ行く直前まで第3次派遣隊として活動することに迷っていた。自分のために貴重な経験をしたいという正直非常に失礼な好奇心から第3次派遣隊に応募したことを後ろめたく思っていたし、ボランティア経験の無い自分が現地の方の力になれるのか分からなくなったからだ。しかし、これまで事前準備をするうえで自分のためにではなく、いかに相手のニーズに応えられるかが最も需要だと気づくことができていたので、これからは迷わずに活動しようと決意した。この結論は、第3次派遣隊の先輩方がいなくては辿りつけなかったと思う。第3次派遣隊に参加していた先輩方に出会えたことは、私がボランティアに参加してよかったと思っていることの一つである。3.11の震災によって被災された方の方の力になりたいという目標を持って、8月26日に私達第3次派遣隊は福岡から宮城へ移動した。私達が宮城で目にしたのは、かつて町であったはずの更地、鉄骨だけのこった建物、仮設住宅で暮らす多くの大切な物や人を失った被災者などであった。しかし、私が宮城で出会った多くの方は前を向いているように見えた。仮設住宅を訪問し被災者の方と話したが、本当に強い人たちだと思った。

被災地に行って、最もよかったと思っていることは、被災者の方々にありがとうと言ってもらった

ことだ。自分には何ができるか分からず迷っていたし、学生のボランティアが受け入れてもらえるか不安に思っていた私にとってはとても嬉しかった。僅かかもしれないが、被災地の方々の力になることができたと感じた。

悩んだことも多かったし被災地での活動中、夜のミーティングでは意見がぶつかったこともあったが、第3次派遣隊に参加して本当に良かったと思う。この私達の活動が3.11の復興に貢献できるように、私はこれからも今回の活動の感想を広めなければならない。

私は初めて訪れたが、宮城県は人が優しくて魚が美味しい良いところだった。今回私が見た場所が今後どうなるのかとても興味があるし、小学校で一緒に遊んだ子供達の大きくなった姿を見たいので、近いうちに必ずもう一度今回と同じ場所に行くつもりだ。そうして、一度きりではなくこれからもずっと被災地の復興の手助けをしていきたい。



## 【C班リーダー】 鹿垣 孝太郎（商学部商学科）

私は8月26日から30日の4泊5日で第3次福岡大学派遣隊C班リーダーとして宮城県南三陸町へ行きました。私がこの第3次派遣隊へ志望した理由は、2年前の震災の報道を見て小さいことでもいいので私自身にできることはないかと考えたからです。

そこで現地へ行き自分の目で見て、自分の手で被災地の復興の手助けをするのが一番と考えました。

実際に現地に行くと唖然としました。かつて住宅密集地であった土地は何もないさら地になり、全長60メートルの大型漁船が陸上に打ち上げられポツンと立たずんでいる、がれき撤去をした際に大量の家財道具や生活感あふれる物が土の奥深くから出てくるといった普通では考えられない状況を目の当たりにしました。

私は4日目の被災した面瀬小学校の子供たちとの交流が深く印象に残りました。子供たちはとても元気いっぱいだったのですが最後にみんなで手を繋ぎ童謡「BELIEVE」を歌った際、私のペアの女の子が急に替え歌で「たとえば家が流されて、くじけそうになったときは、必ずぼくがそばにいて作ってあげるよ、その家を」と笑顔で口ずさんでいました。雑踏の中その歌を聞いたのですが今でもはっきりと覚えています。いまだに女の子がどのような気持ちで歌ったのか定かではありませんが、私はどうしていいか分からなくなり、何とも言えない気持ちになりました。

5日間、がれき撤去、被災地の方々との交流を中心に活動を終えて福岡に帰りました。この5日間の活動は私自身の中ではとても大きいものとなりましたが、被災地に貢献できたかという点では疑問が残ります。本当の意味での貢献は、被災地の現状などを実際に目で見てきた私たちが発信し行動することだと考えます。被災地では風評被害で作物や商品が売れないといったことが深刻な問題になっています。その他にも報道が少なくなった今、風化を防ぐ意味でもこれから機会や場面があれば積極的に発信していき、被災地の方たちが私たちに求めている事を考え行動したいと思います。

最後にこのような機会を与えてくださった福岡大学、そして学生課の方々、不慣れなリーダーを支えてくれた第3次派遣隊のみんなに感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

## 粒田 直希（経済学部産業経済学科）

今回このボランティアに参加した理由は、私は4年次生ですが、これまでの学生時代で、現地でのボランティア活動に参加出来なかったことが心残りだったからです。5日間と短い日数でしたが、多くの体験をさせて頂いた中で、特に印象的だったことを書きたいと思います。

1日目の昼に仙台空港に着き、南三陸町にある上山八幡宮へ向かいました。移動中のバスから町並みを眺めていたのですが、テレビで見た震災当時の悲惨な光景はなく、建物は全くなきさっぱりしていて復旧の速さに驚きました。しかしよく見るとガードレールがぐちゃぐちゃになっていたり、道路が浸水していたりとまだ爪痕が残っている状態でした。上山八幡宮では震災当時の出来事を紙芝居で話を聞かせて頂きました。紙芝居にすることで言葉がわからない外国の方にも絵なら伝えることが出来るということでした。「ぼくのふるさと」というタイトルで子どもの前向きさ、柔軟な子どもらしい考えから生きる希望、震災で失ったものばかりでなく得たものを教えてもらいました。また、「あなたの人生で辛い時、苦しい時には被災した人たちのことを思い出して頑張ってください。」という言葉がとても前向きであり、生きられなかった人の分も頑張ろうと思いました。

3日目にはがれき撤去のボランティアに参加させて頂きました。土を掘り返して鉄、ガラス、コンク

リートなどを手作業で分別していきました。土の中からはキーボード、フライパン、サッシ、タイヤ、子どものおもちゃ、しゃもじなどが見つかり、今は何もない広いこの土地に人が暮らしていたことが分かり改めて津波の恐ろしさ、被害の大きさを実感しました。

今回の東北ボランティアで学んだことは3つありました。1つ目は、ボランティアをさせて頂いていることです。当たり前ではありますが、どのボランティアにもボランティアをする人をサポートするボランティアの人がいます。例えばボランティア先を紹介してくれる人、スコップやバケツなどの道具を準備してくれる人がいて、私たちはボランティアが出来ていることに気がつきました。2つ目は現地まで行って自分の目で見ることの大切さです。言葉では上手く表現出来ませんが、テレビや新聞では伝わらない思いが心に残りました。3つ目は現地での活動だけがボランティアではないということです。私は現地で直接何かを手伝いたいと思っていましたが、私が手伝えることは少ないということが現状でした。福岡県という離れた私たちが出来ることは、今回学んだ事を周りの人に発信して忘れないことです。

### 小畑 咲弥（人文学部フランス語学科）

私がこのボランティアに参加したのは、被災から2年半経った今、私たちの中で震災の事が忘れられつつあると思ったからです。実際私も友人にこのボランティアに誘われるまでは、震災の事がニュースなどであまり取り上げられなくなったりした事によって、震災の事を考える機会は全くと言っていいほどなくなっていました。

震災があった当時は何かできる事はないかと考える事も、その手段も今より多くありましたが今は何が出来るだろうと考える事も少なくなっていると感じました。そして私は友人に誘われたからという事もあって参加を決めました。

実際に東北に行って、色々な感情を覚えました。その中でも自分が行く前に想像していた現状と違って迎えてくれた方々が全員笑顔だった事です。もちろんそれは本当に心から笑っている方ばかりではないと思います。その笑顔の裏には沢山の涙があったと思うし、悲しみが一生なくなる事はないと思います。そう感じたのはやはり、東北に実際に行き、直接話を聞くことができ、2年経った今でも涙ぐむ方や話をするのが嫌な方、人と接するのが嫌な方、まだ震災の傷が癒えてない方が大勢いるのが今の現実だと感じたからです。今、私たちに求められている事はがれきの撤去など物理的な援助も必要だとは思いますが、それと別に被災者の方々の心のケアが今後の大きな課題になるのではないかと思います。

今でも仮設住宅に住んでいる方は沢山いて、将来の不安を常に抱えながら、一日一日を懸命に過ごしていらっしゃる。その大変さや辛さは私たちに想像のつくものではないと思います。さらにそんな中で、被災を逆手に詐欺をする人や窃盗、性犯罪などが発生し、心の傷が更に深くなった人も沢山いると聞きました。私が福岡で見る東北のニュースでは知らなかったとても残酷な事実を知り、胸が苦しくなりました。どこに行ってもそういった話を聞く機会があり、その度にまた辛くなり、また私には何が出来るのだろうと考えました。ですが、東北に行っている間でも話を一方的に聞く事しかできず、また更には逆に東北の皆さんは私たちの旅の疲れや学校のことなどを心配してくださり、何も力になれていない私に何度も『ありがとう』と言ってくださいました。学童の子供たちとの交流でも、子供たちの元気さに沢山のパワーをもらったし、そのままずっとこの子供たちが笑顔を絶やさず笑っていてほしいと心から思いました。

この体験を通して私が学んだことは、東北と離れたところにいる多くの人にも2年半という月日は経ちましたが、震災のことを忘れて欲しくないと思いました。遠くにいて、何もできる事がないとしても、忘れるという行為が一番残酷な事だと思いました。そして、より多くの人に現状を伝えていくことが実際に現地に行った自分たちが今やらなければいけない事だと思いました。

### 川元 美希（人文学部フランス語学科）

私が第3次派遣隊としてボランティア活動に参加しようと思ったのは友達に誘われて、何か少しでも役に立ちたいと思ったからです。

現地に行き、被災地見学、農地のがれき撤去、仮設住宅訪問、学童支援などをさせていただき、大変いい経験が出来ました。防災対策庁舎や高野会館跡地、奇跡の一本松などを見学し、崩壊した建物を目の当たりにして数万人もの命を奪った津波の恐ろしさを感じました。何もないように見えていた農地は、少し土を掘り起こしたらがれきはもちろん、洋服や食器、子供のおもちゃ、フライパンなどが出てきて何とも言えない気持ちになりました。家のもの、思い出全てが流されるなんて考えたら相当辛いだろうなと思いました。何十人もの人数で4、5時間かけて5メートルくらいしか作業は進みませんでした。復興には本当に多くの時間と人手が必要だと実感させられました。また、仮設住宅でも小学校でも大変温かく出迎えていただきました。仮設住宅では、震災時の様子や宮城の方言や食べ物の話をしたりして、とても楽しい時間を過ごせました。子供達は元気いっぱい、遊ぼうって言ってきて一緒に走りまわって、元気を与えるどころかこちらが元気をもらいました。

この5日間で本当に貴重な体験ができました。実際に行かないとわからないこととかもたくさんあったし、人の温かさをすごく感じました。温かく出迎えてくれた現地の方々に本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

震災から2年半たち、少しずつ復興も進んでいますが、震災のことが風化している気がします。実際、自分もこのボランティアに参加していなかったら震災のことを考えていなかったと思います。メディアで報道されなくなり、皆が震災について考える機会がなくなってきています。しかし、まだまだ復興のためにボランティアの人手は必要とされているし、風化させないためにも周りの人に経験したこと、被災地の現状を伝えていかなければならないと思いました。この5日間で学んだこと感じたことを、これからは活かし、自分に出来ることをやっていきたいです。

最後に、このような経験が出来たのはたくさんの人の協力があったからだと思っています。関わってくれた全ての人に感謝しています。本当にありがとうございました。

### 大庭 麻喜（経済学部経済学科）

東日本大震災から約2年。正直、ほとんどの復旧が終わっていて、私たちにできることはあまりないのではないかと考えていました。

しかし仙台について、どんどん道を進んでいくにつれて自分で見た光景に言葉を失いました。復旧・復興どころではなく、そこには何もありませんでした。かつては商店や、住宅が並んでいたと思われる場所には雑草が生い茂り、ところどころに花が添えてありました。住宅は一つもなく、基礎だけが少し残っていて、「ここが玄関だな…」、「ここは裏庭に行く途中の水道、私の実家にもあるな…」と考

えていたら胸がぐっと締め付けられ、言葉も出ず、ニュースや新聞で伝わらない津波の本当の威力を目の当たりにし、恐ろしくなりました。

がれきはもう撤去されているだろうなと思っていましたが、大きいがれきは無いものの、津波の水で流れてきた泥の中に埋もれた小さながれきが山ほどあり、土の中までがれきで埋め尽くされていたのだ…と驚愕しました。土の中からは、お皿や歯ブラシといった生活用品から、住宅の一部であったらレンガやコンクリート、そこではかつて普通の生活が営まれていたことを連想させる物ばかり出てきました。そこに住んでいた人々の家族、幸せ、生活などを、すべて一瞬にして奪い去った津波はなんて恐ろしいのだろうと改めて感じました。一生懸命掘っても一日にせいぜい1～2mくらいしか進まない自分はなんて無力なのだろうと、あまりの無力さに悔しくなりました。

最近、大震災の事はニュースや新聞にもあまり出なくなってきました。時間が経つにつれて誰もがあの恐ろしい出来事を忘れていきます。“風化”していきます。しかし、被災された方々にとって、全てを失ったあの出来事は一生心から消えません。今は、心のケアが大切な時期です。津波で、家族や、家や、財産を無くし、夜も寝られなくなった人々が現地には大勢います。皆にはそれを忘れてほしくないです。一瞬ですべてを失った人々が同じ日本の中でこれからもずっと苦しみ、悲しみ続けます。だから、少しでも風化させないためにも、同じことを繰り返し再び多くの犠牲者を出さないためにも、私は福岡で被災地の現状や被災者の心の状態を、皆や後の世代の人達にも伝えていかなければいけないと思いました。被災地のみなさんが一日でも早く笑顔に戻ると嬉しいです。

## 安立 森（商学部商学科）

2013年の夏、私たちは東日本大震災の被災地である宮城県に行ってきました。今年の派遣隊参加人数は26人と、昨年、一昨年に比べると大分減ったのですが、その分とても濃いものになったと思います。

宮城県での私たちの班の活動内容は、1日目、上山八幡宮で工藤真弓さんのお話を聞かせてもらった後、防災対策庁舎、旧高野会館を訪れました。2日目、がれき撤去を行う予定だったのですが、雨天により中止となり、災害ボランティアセンターの猪又さんにお話を伺い、猪俣さんの紹介で志津川中学校仮設住宅を訪問して、雑草処理を行いました。そのあと、奇跡の一本松、道の駅、第18共徳丸の見学に行きました。3日目は、がれき撤去を行いました。4日目気仙沼市へ行き仮設住宅訪問と学童支援をしました。5日目最終日は、朝、上山八幡宮を訪れ、神社周りの掃除をし、東北学院大学の方たちと座談会を行ったのち福岡へと帰りました。

東北の現状としては復興が進んでいる地と進んでいない地の差が激しいと感じました。一見きれいな土地に見えても、少し掘り返せば家具など色々な物が出てきました。

この旅は驚くことばかりで絞りきれないけれど真弓さんのお話、猪又さんのお話、仮設住宅のおじいちゃんおばあちゃんのお話、東北学院大学の学生さん、やはり直接聞く話はとても心に刺さるものがありました。仮設住宅訪問の帰りに一人のおばあちゃんが「ありがとう。来てくれてありがとう。」とずっと繰り返して言ってくれて、泣きそうになりました。現地で聞いたこと、感じたこと、これからもずっと忘れたくありません。復興の手伝いをしたいと思い行ったはずなのに、逆に元気をもらうことが多かった気がします。

福岡と東北はとても離れています。しかしそんな福岡でもできることはあるということを教えてもらいました。東北の食材を使うこと、福岡で地震が起こったときのことを考えておくことなどです。

遠い福岡という地でも、東北の現状、2011年3月11日東日本大震災が起こったという事実を忘れないよう呼びかけていこうと思います。

## 隈 亜矢香（商学部商学科）

私は、軽い気持ちで第3次福岡大学派遣隊に応募しました。また、心の中では震災から2年半経っているし、だいぶ復興しているだろうからもうすることはないだろうと思っていました。しかし、今も仮設住宅には多くの方が住んでいるし、大量のがれきが残ったままの場所もたくさんあるというのが現状でした。一番衝撃的だったのが防災対策庁舎です。震災当時にテレビで見ただけで存在は知っていましたが、骨組みだけ残り、電線はぶらさがり、水道管が曲がっている庁舎を目の前にすると、改めて津波の大きさを実感し心が痛くなりました。また、ボランティアセンターで見た津波のVTRでは津波が家、建物、人を次々にのみこんでいき、町民の方々の気持ちを考えると無意識のうちに涙がでてきました。防災対策庁舎の映像もありましたが、庁舎の屋上にいた人は半数以上流され、庁舎から町民に避難を呼び掛けていた女性の声も、津波と同時に消え衝撃のあまり言葉がでませんでした。消防士や警察官の方々は使命感から、自分の命よりも町民の命のことを考え津波が来るギリギリまで避難を呼び掛けていたと聞き、すごく尊敬しました。

ボランティアの活動としては、仮設住宅の草取り、仮設住宅の方々との交流、農業支援、学童保育、上山八幡宮の清掃を行いました。農業支援では、土を掘れば掘るほど菌ブラシ、洗面器、フライパンなどの生活用品から、車のエンジンやベンチまでも出てくるので津波の大きさを物語っていて恐怖を感じました。学童保育は、最初子どもたちと打ち解けることができるか心配していましたが、前から知り合いだったかのように仲良くなることができました。ほとんどの子が地震や津波を経験しているはずなのに、それを感じさせないくらい元気で逆に私のほうが元気をもらいました。

今回実際現地に行き自分の目で被災地を見ることで、テレビなどでは伝わらないことをたくさん感じることができました。これから復興までにまだまだ時間はかかると思うけど、私にできることはなんでも協力していきたいです。福岡でもいつ自然災害が起こるか分からないので、あとから後悔しないためにも一日一日を大切にしたいと思います。来年も参加したいです。

## 興梠 啓祐（商学部商学科）

8月26日～8月30日までの間、私は第3次福岡大学派遣隊として宮城県を訪れ、ボランティア活動を行いました。

活動内容は、1日目はまず南三陸町の上山八幡宮を訪ね神主さんの講話を聞き、その後防災対策庁舎の跡地など被災地を訪れ、自分の目で初めて現状を確かめました。2日目は、元々がれき撤去作業の予定でしたが雨天により中止となったためボランティアセンターを訪問し、その後仮設住宅の雑草処理を行い、最後に岩手県陸前高田市の奇跡の一本松や気仙沼市の第18共徳丸という震災時に陸上に打ち上げられて今でも残っている漁船を見学しました。3日目は南三陸町でがれき撤去作業、4日目は仮設住宅訪問、小学校訪問、5日目に東北学院大学で意見交換会という流れで全日程を終えました。

今回ボランティア活動に参加してなによりも感じたことは被災地の方々の温かさです。仮設住宅の方々は私たちのような者たちをあまり快く受け入れてはくれないと聞いていたので緊張していたので



すが、そんなことは少しもなく私たちを温かい笑顔で迎え入れてくださいました。みなさんいろんなつらい体験をしたはずなのにずっと明るく笑顔でいるのを見て胸が込み上げてきて自分の悩みなんてほんとにちっぽけなものだと感じました。がれき撤去作業は体力的にきつい作業でした。ピックルで穴を掘ってがれきを探す作業だったのですが、車のスピードメーターや櫛、電卓、名前入りのポイントカードなどさまざまなものが出てきましたが、全て震災当時は人に使われていたものなのだとかこれを使っていた人は今どうなっているのだろうなどと考えると、なんともいえない複雑な気持ちになりました。ボランティア活動には私たち以外にもいろんな県から学生など多く参加していたし、東北学院大学でボランティア団体などで中心となっている学生たちと交流し、このような人たちが多く集まってここまで復興が進みこれからもそうやって復興が進んでいくのだと思うと温かくて嬉しく思いました。一番印象に残っている言葉があります。「祈りは天に届く。みんなの思いは天に伝わっている。だから祈ることはやめないでほしい。」上山八幡宮の工藤さんの言葉です。私も祈ることは大切だと思うし、これからも祈ることは続けていこうと思いました。

これから、私たちがやっていくべきことは被災地のことを伝えていくことです。多くの人に知ってもらいたいです。そして被災地の復興にこれからも協力していけたらと思います。

## 諸岡 あづ咲 (商学部商学科)

8月26日～30日の4泊5日で東北にボランティアに行きました。この4泊5日は私にとって生涯忘れることのない体験になりました。

1日目、仙台空港に着いてからはバスで宮城県の南三陸町まで行き、上山八幡宮という神社を訪問しました。神社に着くまでの間、バスから見えてくる景色がとても閑散としていて、メディアでも取り上げられていた防災対策庁舎も実際に自分の目で見ることができ、津波の恐ろしさをより一層痛感しました。上山八幡宮は高台にあり、津波の被害は受けなかったそうです。そこで神主さんに震災当時の体験を、紙芝居で聞かせていただきました。ニュースで見ると実際に震災にあった方の話を聞くのでは全く感じ方が違いました。正直言葉を失いました。しかし、震災から2年が経過した今、震災にあった方々が未来に向かって前向きに進もうとしている姿を見て、私自身が勇気づけていただいた気がします。

2日目はがれき撤去の予定が大雨で中止になってしまい、ボランティアセンターの方々のおかげで仮設住宅の周りの除草作業をすることができました。中止が決まって何かできることはないかと待機していた時間、なかなかできることが見つからず自分達の無力さに落ち込んだのを覚えています。3日目のがれき撤去は晴天で行うことができ、作業6時間で5mほどしか進まず、すべての土地のがれきを完全に撤去するにはまだまだ時間がかかると改めて感じました。

4日目の仮設住宅訪問、学童支援はとても素晴らしい体験でした。仮設住宅ではそこに住まわれているお年寄りの方々と一緒に掃除をし、雑談し、少しでも元気づけることができとても嬉しかったです。感謝の言葉をかけていただくたびにボランティアに参加できてよかったと心から感じました。学童支援では子供たちの無邪気さ、笑顔に逆に元気をもらいました。

震災から2年以上経過した今、風化してしまいつつある現状で、まず自分達ができることは自分自身の目で見て、聞いて、体験して感じたことを一人でも多くの人に知ってもらい震災のことをいつまでも忘れず、そして今自分が生きていることは当たり前ではなく奇跡なんだと、1日1日を大切に生きていくことだとこの体験を通して強く感じました。

## 2. 引率者レポート

### 井手 俊輔（学生部事務部長）

私は行程の3日目（8/28）から第3次派遣隊に合流し活動に加わりました。その現地入りした日が印象的だったので、その日のことをお伝えします。

お昼過ぎ仙台空港に到着後、迎いのバスに乗り込みボランティア活動の現場へ向かいました。車中で作業用の服へ着替え、到着までの間は外の風景を見ていたのですが、はじめ暫くは海岸沿いにやたら広い空地があるな、といった感じの風景が続きます。以前は街並みがあり大勢の人が暮らしていたのでしょうか、そのことを思いもしない程に更地が広がっています。作業現場に近づくに従い基礎部分だけの建物や、家は真新しいけど部分的にブルーシートが掛けられているもの、修復されない部分が剥き出しになったままの家がぼつぼつと現れてきます。人の気配もなく、復旧への程遠さを感じさせる風景が続きます。遠くを見ると高速道路が走っていました。バスの運転手によると、その高速道路が命の境界線だったそうです。高速道路に登れた人は助かり、間に合わなかった人は……。

現場での作業は、以前は宅地だった場所を農地として転用するための下準備で、スコップで土を浅目に掘り、農地化の邪魔となる小石、ガラスや陶器の欠片などを取り除くものです。地元ボランティア関係者の指示の下、朝早くから黙々と作業を続ける本学の学生達が頑張っており、私も午後の僅かな時間ですが作業に加わりました。気温は30度を超えていましたが、風が吹くと爽やかで日陰に入ると暑さを感じない程でした。

作業が終わり宿舎へ帰る途中、仙台市若林区荒浜に建立された慰霊碑にお参りすることになりました。その慰霊碑には、200人近くの震災犠牲者の名前と年齢が刻まれていました。高齢者が多いなか、2歳、3歳といった短い命に目が止まります。

慰霊碑の後ろには深沼海水浴場という仙台市内唯一の海水浴場があり、砂をかぶった堤防に立つと、180度にわたり水平線が走る壮観な海が広がっていました。でも、この海岸一帯は市の災害危険区域に定められているため、この夏も海水浴場として開設されないままということでした。復旧の鈍さを感じるとともに、海水浴場が少しでも早く開設され、沢山の笑顔と歓声が戻ってくることを祈りました。慰霊碑に刻まれたあの子達も楽しみにしていることでしょう。

さて、参加した学生は4月の募集に始まり、グループ毎の打合せや事前研修、そして幾つかの目的を持って8月5日間のボランティア活動に臨んだわけですが、目的を果たせたか否かは個々の判断に任せたいと思います。ただ、今回派遣隊を通して体験したことを忘れずに、また、何気ない日常の大切さを感じながら、これからの貴重な日々と真摯に向き合い進むことを願うばかりです。

### 三浦 和也（学生課員）

東日本災害ボランティア第3次福岡大学派遣隊を終えて

私は今回の派遣隊に引率として選んでいただき、企画の成功と学生の安全確保はもちろん、自身をもう一度見つめ直す場として臨みました。第3次派遣隊の運営担当者として、派遣隊員の募集、事前研修、現地での活動、事後の活動報告会の実務を行い、8月26日から5日間、宮城県南三陸町を拠点に活動を行いました。震災発生から3年が経過し、がれきの撤去はほとんど終了しているものの、壊れたままの堤防や崩落した橋、骨組みだけの家屋やプレハブで運営するコンビニなど、まだまだ復興したとは到底言えない光景でした。

過去2年間でお世話になったところでは、上山八幡宮、南三陸町災害ボランティアセンター、気仙沼市南最知仮設住宅や面瀬小学校などを訪問し、活動の継続性を意識して取り組みました。南三陸町長へ表敬訪問した際に、「今年度も南三陸町へ遠く九州からお越しいただき深く感謝しています。今回の活動での体験や経験を持ち帰った後に家族や友人に伝えていくことが私たちの願いです。」という言葉をいただき、今回の目的を再確認するとともに改めて身が引き締まりました。また、今年度は東北学院大学（宮城県）との交流の場を設けていただきました。交流会では、東北学院大学ボランティアステーションで活動する学生の活動状況を拝聴し、「ボランティアを通じて学生は何ができるか」というテーマでグループディスカッションをさせていただきました。様々な人々との出会いを通じて、ボランティア活動に従事し、復興の一端を担うことができ充実した5日間を送ることができました。

今回、6学部総勢26名で活動に臨みましたが、うち2名が第1次、第2次派遣隊の参加者でした。震災から3年目を迎えた現在でも、福岡大学には「誰かのために何ができるか」という奉仕精神が学生のなかで日々醸成されてきていること、過去に参加した学生が震災を風化させず再び貢献したいと参加してくれることに、深く感動をしました。

5日間の経験のなかで、今回の経験を一人でも多くの方々に語り継いでいくことが私の復興支援だと思います。遠く九州からでは被災地への協力は限られていますが、今回出会った人々とともに生きていることを忘れず、日々の生活を大事にしていきたいと思います。

## 飯星 信二（学生課員）

今回、第3次福岡大学派遣隊の担当をさせていただきました。正直今回の担当が決定した当初、不安な思いよりも現地の人々のためになれるといった気持ち、この活動を担当できる喜びのほうが強かったことを覚えています。約3年前に起きた他に類を見ないこの災害を報道等を見て、常々私は被災地の人々の役に立ちたい、そして、可能であればこの目で被災地の現状を確認したいという思いがあったからです。活動期間は5日間という短期間ですが精一杯ベストを尽くそうと誓いました。

第3次福岡大学派遣隊は、例年と違い、学生自身が主体となって現地での活動を決定するといった内容だったため、例年に比べて、多くのオリエンテーションを実施しました。ほとんどの学生が企画立案をすることが初めてだったようです。学生は本当に沢山の案を提案してくれましたが、実現させてあげられないことが多くありました。紆余曲折があったものの、何とか出発前に現地での活動内容を決定することができました。しかし、準備不足もあり、派遣隊も団結しきれていないように感じました。こういった状態で、現地でベストが尽くせるか正直不安でした。

様々な不安を抱えながら現地へと向かいました。現地は、大きながれきの撤去はほとんど終わっていました。かつて人々が生活していた地域は一面草むらとなっていました。この光景を目の当たりにし、派遣隊の空気が変わったように感じました。そして、現地到着日に訪れた上山八幡宮神主さんのお話を聞かせていただいた後、第3次派遣隊が初めて一つにまとまったと感じました。

実際に現地での活動が始まってからも、各班が一丸となり精一杯活動をしていました。そして、慣れない現地での活動で疲れているにもかかわらず、連日連夜遅くまで次の日の活動の打ち合わせをしていたようです。その甲斐があつてか、活動の際には様々なイレギュラーもあったものの、行った先々で皆様にとっても喜んでいただけようと感じました。いかに現地の方々のためになれるか、学生自身が自分達なりに問題に立ち向かい解決していく姿を間近で見て、確かな成長を実感しました。

現地の方は皆こう言っていました。最近津波の被害があったことが忘れられている。何よりも忘れられるのが一番悲しい。実際に現地で見たと、聞いたこと、そして現地の人々は復興に向かって前向きに活動を行っていることを、身近な人でも良いので伝えてくださいと。

現地での活動は5日間で終わりました。しかし、実際に私たちの活動はまだ終わっていません。私たちはこれからも遠く離れた東北の地で経験したことを伝えていかなければなりません。

## 5 活動でお世話になった方々からのメッセージ

### 工藤 真弓 様（上山八幡宮）

福岡大学の皆さん。東日本大震災後は東北（南三陸町）に、毎年ボランティアに来て下さって本当にありがとうございます。

1年目は神社下にあった自宅のがれき撤去を1時間しかない中、見事な連携でして下さり、2年目は町内支援を前に「つなみのかみしばい」を涙を流しながら聞いてくださいました。3年目の今回も、つなみのかみしばいをお伝えしましたが、皆さんは大勢でいながら一つの大きな塊のように乱れない何かに包まれているように見えました。被災地に来る前は何度も研修を行っていらっしゃるそうですね。真の奉仕の心が全ての人に備わっているような尊さを感じました。神社のお務めも、ご奉仕のところが問われますが、祈りの本質を皆さんから教えていただいたような気がします。最後に代表の学生さんがお話しされながら、美しい涙をこぼされました。皆さんの美しい涙のような思いが注がれ、町は再生しています。みえないけれど確かな「祈りの種」をたくさん蒔いてくださって、本当にありがとうございました。

### 其田 雅美 様（東北学院大学）

東日本大震災発生から月日が経過するにつれ、震災そのものおよび復興の取り組みについて、我々の日常から風化していくことは事実です。ただ、福岡大学チームの皆さんがこの事象に関心を持ち、定期的な実活動、福岡に持ち帰った後の活動に取り組まれております。私自身、宮城県民として感謝の気持ちと次世代の社会を担う若者が関わること、とても頼もしいことでもあります。

また、教育機関に所属している一人の大学職員として申し上げます。復興活動に関わられた皆さんにとって、大学生活の中で体験した貴重な活動になっており、自身の糧となっているはずです。

今後の皆さん一人一人の生活において、復興に関わる活動は、無理をする・背伸びをする必要はなく、「メッセンジャー」として様々なかたちで情報発信など身近な活動を行っていただくこと、それが復興の力となることを確信しております。

## 岡田 裕二 様（仙南交通株式会社）

先日は遠方九州福岡より被災地宮城へボランティア活動へお越しくださいますてありがとうございます。今現在被災地は建物が取り壊されがれきが処理され震災当時の無惨な状況の光景はなくなり更地となり殺風景になっております。しかし何もかも失ってしまった被災者の方々は、少しずつではありますが、一步一步と前進し生活をしております。

間もなく東日本大震災から3年が経過しようとしています。しかし、またいつ大地震が発生し、災害を体験するかわかりません。地震イコール津波が来ると思わなければなりません。自分の命は自分で守らなければなりません。自宅にいるとき、学校にいるとき出先の場合など、各々の場所で避難する場所を決めておくことが大事です。また、電気、水道、ガスのライフラインがストップした非常時に衣食住をするため、何が必要かを考え、食料品、生活用品を十分に備蓄していただきたいと思います。そしてライフラインが使えるようになるまで対応できると思います。

最後になりますが、福岡大学派遣隊の皆様のご活躍を祈りますとともにご自愛下さいますようお願いいたします。

## 金戸 悠梨子 様（ReRoots若林ボランティアハウス）

今回の活動では土ふるいの作業をしました。農家さんの庭で、小石やがれきが混じった土にふるいをかけて小石やがれきと砂を分けるということをしました。分けられた砂は指定されたスペースにふるい、ふるいかけが全部終わったらそこで農家さんが野菜や花を育てたいとおっしゃっていました。土は湿っていると重くなって力作業になりますが、福岡大の皆さんは弱音も吐かず作業を進めていたのが印象的でした。この日はアメリカからの留学生も一緒に活動をしました。留学生とも気軽に声を掛け合い、和気あいあいとした雰囲気の中でするふるいかけは、重労働ではありましたがあの場で作業をしていた全員が楽しんでいました。これからの被災地のことなどを話した際には皆さん真摯に聞いてくださっていましたし、実際に東北に来たからこそ分かるいろいろなことを感じて頂けたのではないかと思います。

### 【第3次派遣隊にご支援ご協力いただいた方々】

宮城県南三陸町長 佐藤仁様

宮城県南三陸町役場の皆様

宮城県南三陸町 上山八幡宮 禰宜 工藤真弓様

宮城県南三陸町災害ボランティアセンターの皆様

宮城県気仙沼市社会福祉協議会ボランティアセンターの皆様

宮城県気仙沼市立面瀬小学校校長 長田勝一様および先生方

宮城県気仙沼市立面瀬小学校区学童保育なかよしクラブの先生方および子供達

宮城県気仙沼市南最知仮設住宅の皆様

宮城県気仙沼市志津川中学校仮設住宅の皆様

宮城県仙台市青葉区東北学院大学の皆様

一般社団法人ReRoots若林ボランティアハウスの皆様

宮城県南三陸町 ホテル観洋様

仙南交通株式会社の皆様

株式会社近畿日本ツーリスト ご担当者様

福岡大学関係

東日本災害ボランティア第1次、2次福岡大学派遣隊引率者・隊員各位

※この他多くの方々のご協力を頂きました。謹んでお礼申し上げます。

## 謝 辞

本報告書は、東日本災害ボランティア「第3次福岡大学派遣隊」の活動報告をまとめたものです。

この報告書は派遣隊隊員および活動中にご協力いただいた関係者からのご寄稿により完成しました。

昨年、一昨年に引き続き、福岡大学では26名のボランティアを派遣しました。被災地におけるボランティアのニーズは刻々と変化し多様化しています。そのような中、限られた時間と力を最大限活かすために隊員が一丸となって準備を行いました。また、第3次福岡大学派遣隊は、学生が主体となって自分たちの活動内容を決めていくといった形式でした。現地のニーズに合わせて活動内容を決定する際も班員、その他の班と納得のいくまでよく話し合い今回のプログラムを決定しました。その結果、皆様に喜んでいただけた姿を見たときは感無量でした。猛暑の中活動したにもかかわらず、脱落する者もなく、力の限り作業を行いました。

住民の皆さんを元気にしたい、隊員全員が同じ気持ちで臨みましたが、現地の皆さんと交流する中で、元気をもらったのは我々のほうでした。

昨年、一昨年とは異なり26名とコンパクトになったため、やりたいことが細かくなり、ご無理やこちらの思いばかりを申しあげる場面もあり、大変ご迷惑をお掛けいたしました。また準備から活動期間中、派遣後まで学内外の多くの方々にお忙しい中ご協力いただきました。心よりお礼を申し上げます。

最後になりましたが、東日本大震災によりお亡くなりになられた多くの方々のご冥福と一日も早い被災地の復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

東日本災害ボランティア「第3次福岡大学派遣隊」一同



---

平成25年度 東日本災害ボランティア  
「第3次福岡大学派遣隊」活動報告書

平成26年 3月 発行

発行 福岡大学学生課  
福岡市城南区七隈八丁目19番1号  
TEL 092-871-6631 FAX 092-873-2981

---



人をつくり、時代を拓く。

静岡大学